

函館高専に於ける英語多読指導の試み-最終報告-

竹村 雅史¹

(2006年10月13日 受理)

Introducing Extensive Reading into the Basic English Class at Hakodate National College of Technology
-A Final Report-

TAKEMURA Masashi

The purpose of this paper is to present a final report on introducing extensive reading program into the basic English class at Hakodate National College of Technology. This program is now being conducted for both improving students' reading ability and investigating how the students' motivation for reading has been developed by their extensive reading activity for about one year through a questionnaire survey. The results of the questionnaires may reveal that this approach has promoted the students' interests for reading texts much more than before.

Key words: Reading, Extensive reading, Motivation

1. はじめに

英語学力の向上を図る上で欠かせない事項に学習時間の確保が挙げられる。学習者が意欲を持って英語学習にどれだけの時間を割くことができるかで、その英語力の伸びしろは変わってくる。

英語に触れる絶対量の不足を解消する一つの方策として、個人の学習ペースで読み進める英語多読指導が近年関心をよび始めている。現状の授業では、同一テキストを同一時間内で読み進めているが、これでは、個人の学習能力を制限してしまうことになる。学生の英語力は個人の学習意欲と密接にかかわっており、個人の学習能力（ここでは、読解力を中心に）を伸ばすことが結果的に全体の英語力の伸展にもつながる。

英文多読授業は幼児対象の英語学習塾から大学の一般英語での取組に至るまでに全国的な広がりを見せてきている。特に、高専ではこの授業を導入する試みが全国的な広がりを見せ^{1) ~6)}、研究会

を組織しながら多読授業の研究への取組が始められてきている。

本校でも2年前から1学年の英語講読の授業で、30分の英語多読指導を図書館で行っている。1年経過した今、その取組の現状を報告する。

2. 多読指導とは

一般に授業者と学習者が同一のテキストを用いて英文の細部に注目しながら行う授業を“精読指導”と呼ぶのに対し、逆に学習者に対し多くの英文を課して読み進めていく指導が“多読指導”である。

多読指導にも様々な形があるが、本校では今回SSS(Start with Simple Stories)多読学習法を採用した。これは、酒井邦秀(電気通信大学)氏*が提唱した3原則、すなわち

*SSS 英語学習法研究会とは、この学習法を提唱している研究団体で <http://www.seg.co.jp/ss/>で指導法、対象図書などを紹介している。

¹ 函館工業高等専門学校 一般科目人文系

- 第1原則：辞書は引かない。
- 第2原則：わからないところは飛ばす。
- 第3原則：つまらなくなったらやめる。

にのって最初、絵と単語程度しか書かれていない幼児レベルが読むグレードから英語圏の中学生レベルまでのテキストを、自分のペースに合わせて読んでいく多読授業⁷⁾である。

3. 本校での多読指導の実践

本校では、2005年4月から1学年の英語講読（担当：竹村）の時間内で英語多読授業の導入を開始した。各英語教員は横割りで授業を持っており、学年全体（全学科）に指導が行き届く体制が組み立てられているのでその効果は学科間に偏ることなく行き渡ることが期待された。

1学年の英語講読（90分、2006年度から100分）で各学科30分程度を多読に当てることを考えた。年間合計時間数に換算すると約12時間であるが、毎週継続的に英文に触れることで英語を身近に感じられる環境を作ることが可能となった。

一昨年度（2004）と昨年度（2005）の本校の教育充実設備費と選定図書予算で、語彙範囲が限定されて書かれている Graded Readers を中心とした基本単語200～400語レベルの多読用テキスト約1,200冊を購入した。更に、読みやすさのレベル分けを6段階に色分け設定し、図書館の入口脇に専用の棚を設けてもらいそこに配置した。

英語講読の授業の後半30分になると学生は図書館に移動し、自分の興味のある英語テキストを選び、読み終わったら読んだ本のタイトル、単語レベル、評価、簡単な感想を読書シートに記入する方法をとった。当初は、それを評価し成績に加味することを考えたが、本来の読書の楽しみを歪めてしまう恐れがあるので、あくまでも多読授業に参加している証として書いてもらうことに決めた。

4. 本研究の目的

本稿は、前回の英語多読授業の中間調査⁸⁾と同じアンケート項目を用いて、1年を経過した段階で最

終調査を実施し、学習者がこの多読授業をどのように捉えているのかをアンケート調査で概観することが目的である。

5. アンケート調査結果

アンケート項目は前期末の2005年9月に実施した中間調査の質問内容を一部改訂し、後期末の2006年2月に最終調査を実施した。回答者は本校の5学科（機械、電気電子、情報、物質、環境都市工学科）の1学年全員、200名を対象とした。（欠席などの理由で中間調査と最終調査のいずれかを欠席した者は除外している）回答者は全員英語の必修科目（英語講読）を終えた段階での回答であった。

5.1 英文多読授業の印象について

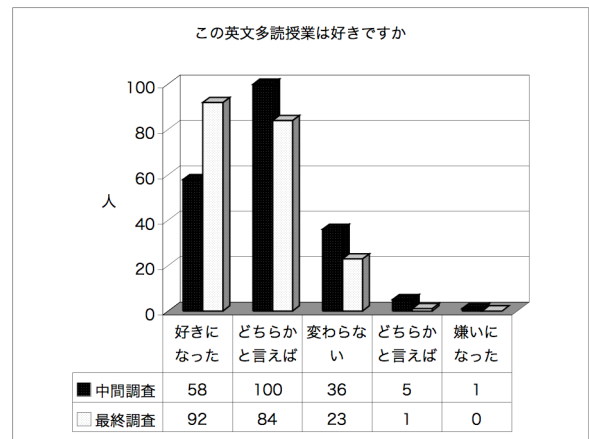


図1 英文多読授業の印象

図1は、英文多読授業の印象を尋ねたものである。「好きになった」と「どちらかと言えば好きになった」の2項目で中間調査（79%）と最終調査（88%）ともに多読授業の印象が良く、学年が終了した段階でその支持も上昇したことが伺える。「変わらない」も減少していることを考慮すれば、ほとんどの学生は、この多読授業を好意的に受け取っている。多読授業を成功させるためには、出だしに学習者が読書に好印象を持たせることが重要である。この点で、英語に対する抵抗感がなく導入できたと思われる。

5.2 英語を読むことへの意欲について

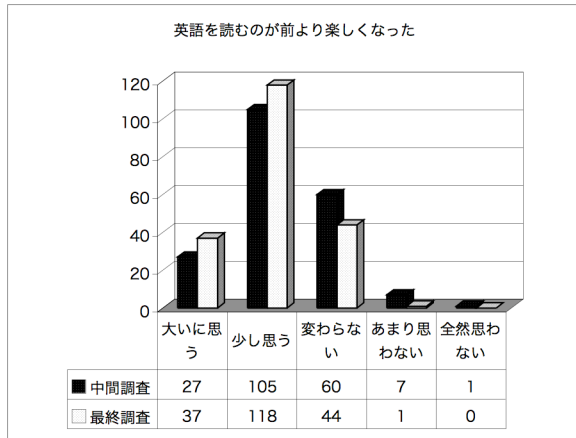


図2 英文を読むことへの意欲

図2は、多読授業で英文を読む楽しさが身についたかを調べたものである。中間調査に比べ最終調査で2項目、「大いに思う」と「少し思う」で増加している。また、「変わらない」と「あまり思わない」が減少していることを考慮すると、多読授業が英文を読む行為を促進させている一因となっていることが伺える。Nuttall(1982)⁹⁾によると、多読授業で最も大切な要素は、「読んで楽しい」という気持ちに繋がっていくことであり、このことが多読の大きな魅力であると述べている。今回の調査で、これを裏付ける結果が出たように思われる。

5.3 英文を読む速度について

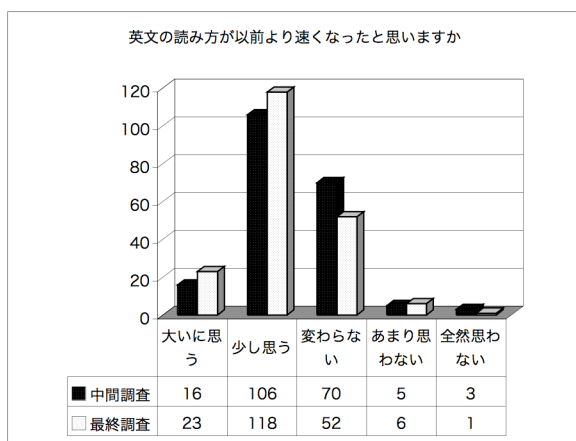


図3 英文を読む速度

図3は、多読で英文を読むスピードが速くなるかを調査したものである。実際の読書速度の測定は、

別な調査に譲るが、「英文の読み方が前より速くなった」では「少し思う」と「大いに思う」を合わせて中間調査で61% (122人)、最終調査で70.5% (141人)の学生が読むスピードが伸びたと実感している。「楽しい」から「速く読める」という正の循環に繋がっていることがここで伺える。また、「変わらない」が、中間調査に比べ70人から52人に減り、この減少した分が「速く読める」層に移ったことと思われる。

5.4 辞書への依存について

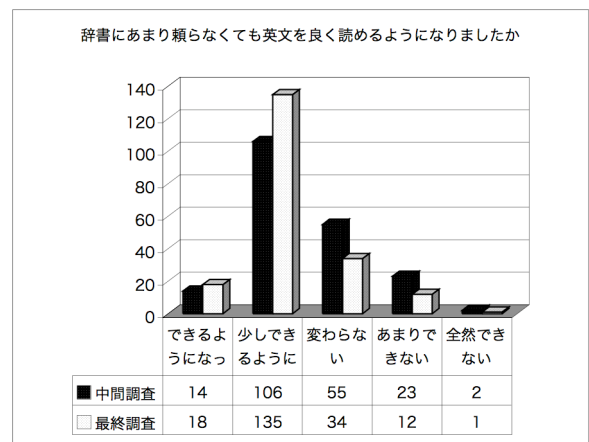


図4 辞書への依存

図4は、読む際の辞書への依存度と多読との関係を表している。「変わらない」、「あまりできない」、「全然できない」の3項目で16.5% (33人)減少した分、「できるようになった」と「少しできるようになった」の2項目がその分増加している。多読をする際の3原則の一つである「辞書を引かない」というルールが、英文を読み進める上で生きていることに繋がっているように思われる。

5.5 家での英語の本や雑誌を読む習慣について

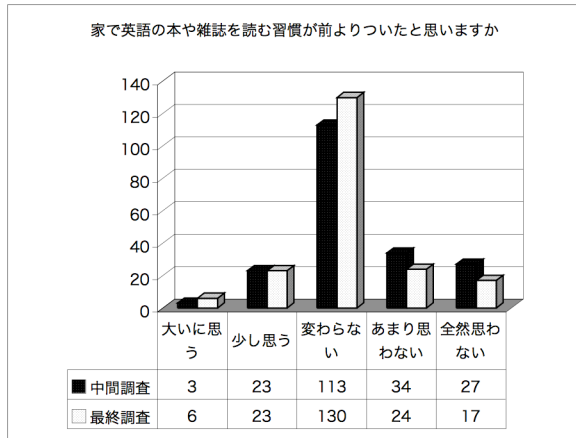


図5 授業以外で英語を読む習慣

図5は、授業以外での英語を読む習慣が多読授業によって形成されるのかを調べたものである。ほとんど、中間調査と最終調査の時点で変化がない。多読授業を経験したから、即、家庭での英語に接する機会が増える訳でもなく、あくまでも学校の授業の教科の枠の中でとどまっていることが伺える。この項目は、長期的な視野で改めて質問すると、面白い結果が出るかもしれない。

5.6 「英語を読むこと」への思いについて

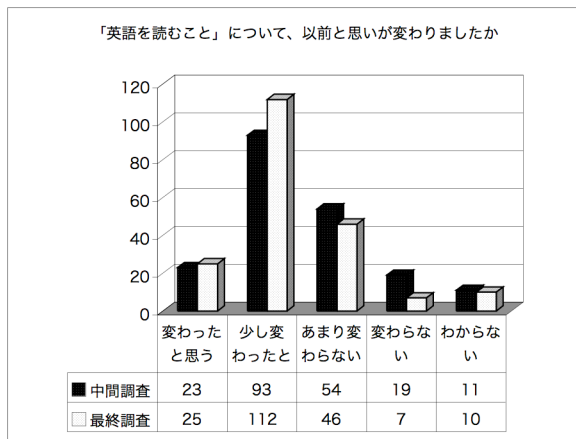


図6 英文を読むことへの思い

「英語を読む」行為は、学生は教科としてのテキストを読む時に生まれる思いである。それは、難しいと感じたり、億劫と思ったり、教科だから仕方ないとか、個人個人の思いは、授業で形成されるものと考えられる。図6は、これまでの英文に接する気

持ちの変化を尋ねたものである。中間調査と最終調査の差はあまりないが、多読授業を経験して、半年が経過した時点で、「少し変化した」項目が一番高く数字になって表れている。その変化の中身は、詳細に更に調査する必要があるが、変化していることは、間違いない。

5.7 多読授業の継続希望について

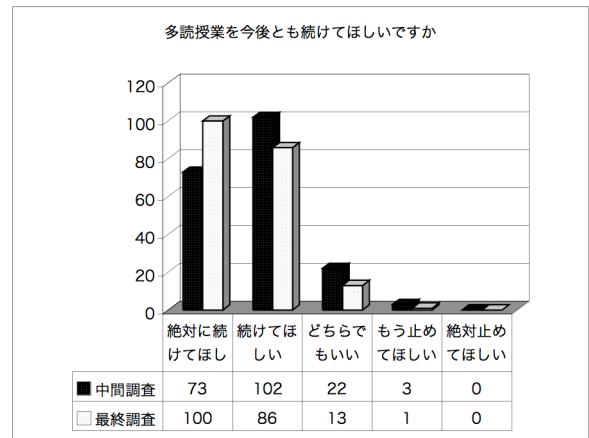


図7 多読授業の継続希望

今後更にこの多読授業を続けほしいという人数は(図7)、中間調査で「絶対に続けてほしい」、「続けてほしい」合わせて87.5% (175人) から最終調査93% (186人) に上昇している。中間調査時点での「続けてほしい」、「どちらでもいい」の2項目から最終調査での「絶対に続けてほしい」の項目に多くの学生の意識が変化していることが判明している。大半がこの多読授業の継続を希望していることがわかった。前回の中間報告で「英語が好きではない」と答えた学生が46%も存在している中、やはり、この数字は、英語学習の動機付けという点で大きな意味を持っているように思われる。その多読を支持する理由は以下の5.8に挙げられている。

5.8 多読授業を支持する理由について

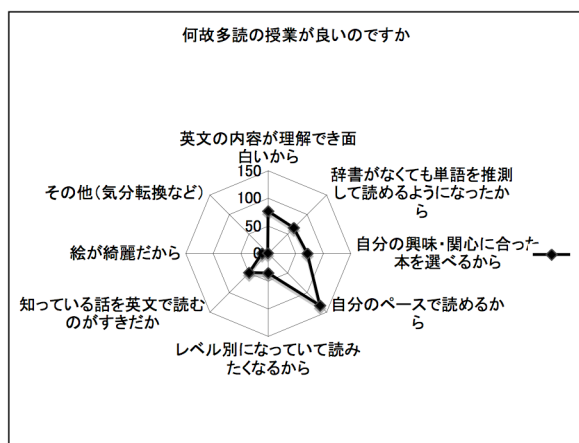


図7 多読授業を支持する理由
(複数回答)

5.7 を受けて、図7 は多読授業の継続を求める理由を示している。一番の理由として挙げられているのは、「自分のペースで読めるから」(133人)である。一斉授業で同一テキストを読むのとは違い、自分の読みたい本をじっくり、納得しながら読み進めることができるのが、多読授業の大きな利点であることがわかる。二番目として、「英文の内容が理解でき面白いから」(76人)が挙げられている。これこそ、読書の醍醐味を味わえた証である。しかも、たとえ下位のレベルの本であっても、英語で内容を理解できた喜びは、英語学習の動機付けを促すものである。多読授業での学習者の発見が自立的な学習者への成長に繋がる側面を多読授業が有していると言える。三番目は、「辞書がなくても推測して英文を読めるようになったから」(66人)である。これも多読3原則が生きている証である。辞書がなくても前後から類推して内容把握をする力がつきつつある。語彙レベルでテキストが作られているので、未知の単語はそれほど多くテキストに登場していないこともあり、辞書が無くても読書を楽しむことが可能であると思われる。

6. おわりに

中間調査を経て1年を経過した調査結果から、平成17年度の学生は多読授業を楽しみ活動として受け入れ、英文を読む楽しさを実感できたことが判明した。

英文を読む行為を支える、読書本来の喜びを維持する上で、この多読授業は、英文を身近なものにする相応しい授業方法の一つであると思われる。「読書が楽しい」→「自分のペースで読める」→「多く読める」→「速く読める」→「よりわかる」という正の循環での読書が、学生の英文に対する積極性を育むものであると確信する。

本校は、これまで1200冊を超える英文多読書籍を備えるに至った。多読授業を成功させるための重要な条件として、読み手が読みたいと思うジャンルのテキストや冊数が重要になってくる。今後も、学生支援の一環として蔵書数を充実させたい。

参考文献

- 1) 新川智清：高専における英語教育の現状と沖縄高専の取り組み, 高専教育第28号, 101-106(2005).
- 2) 竹田恒美, 堀 智子：専門学科と連携した多読指導の試み, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集第24号, 65-72(2005).
- 3) 長岡美晴, 深田桃代：豊田高専における英語多読指導の試み, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集第24号, 37-43(2005).
- 4) 吉岡貴芳, 西澤 一：理系クラスでの多読授業, 「英語教育」, Vol. 52, No. 12, 大修館, 18-20(2004).
- 5) 吉野康子：高専低学年の英語多読指導に関する一考察, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集第23号, 15-24(2004).
- 6) 吉野康子：高専生の英語多読指導実践-高専生の学習意欲の育成を求めて-, 長野高専紀要 38号, 141-148(2004).
- 7) 古川昭夫, 伊藤晶子, 酒井邦秀監修：100万語多読入門, コスモピア, (2005).
- 8) 竹村雅史：函館高専に於ける英語多読指導の試み-中間報告-, 函館高専紀要 40号, 83-88(2005).
- 9) Nuttall, Christine: Teaching Reading Skills in a Foreign Language, Practical Language Teaching, 177-182(1982).